

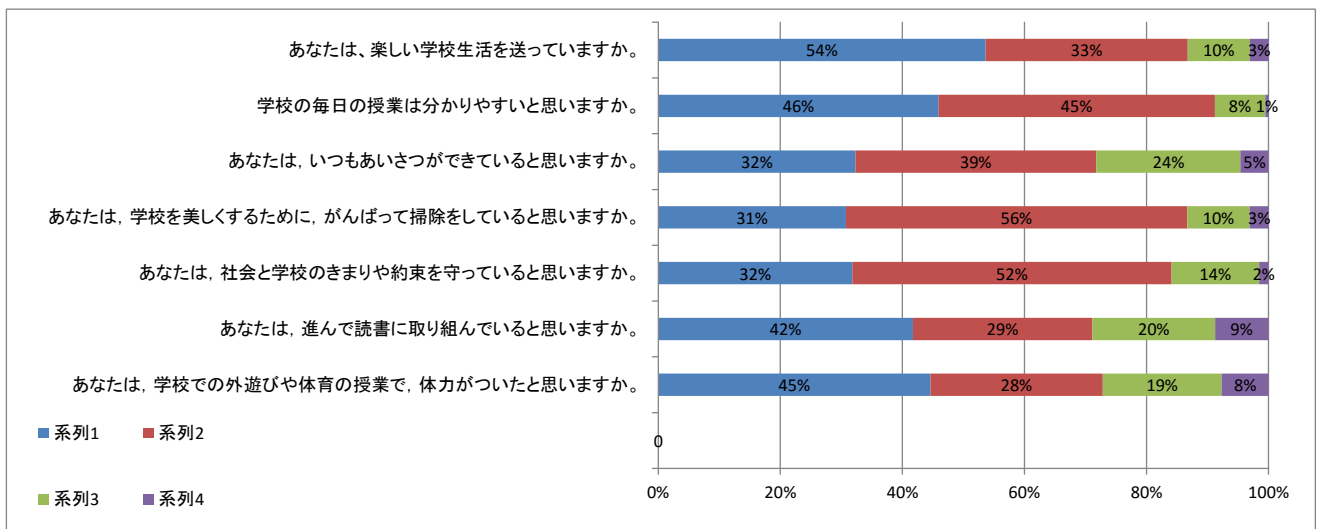
令和2（2020）年度「学校評価」アンケート結果について（総括）

学校評価は、子どもたちがよりよい教育を享受できるよう、その教育活動等の成果を検証し、学校運営の改善と発展を目指すための取組である。今年度の学校評価については、前年度までと同様の内容で実施した。昨年度までの結果と比較・検討するためにも同じ項目であることは有効であり、また、学校教育目標である「確かな学力」「豊かな人間性」「たくましい心身」が達成されたかどうかを検証する材料としても適切であると判断したためである。

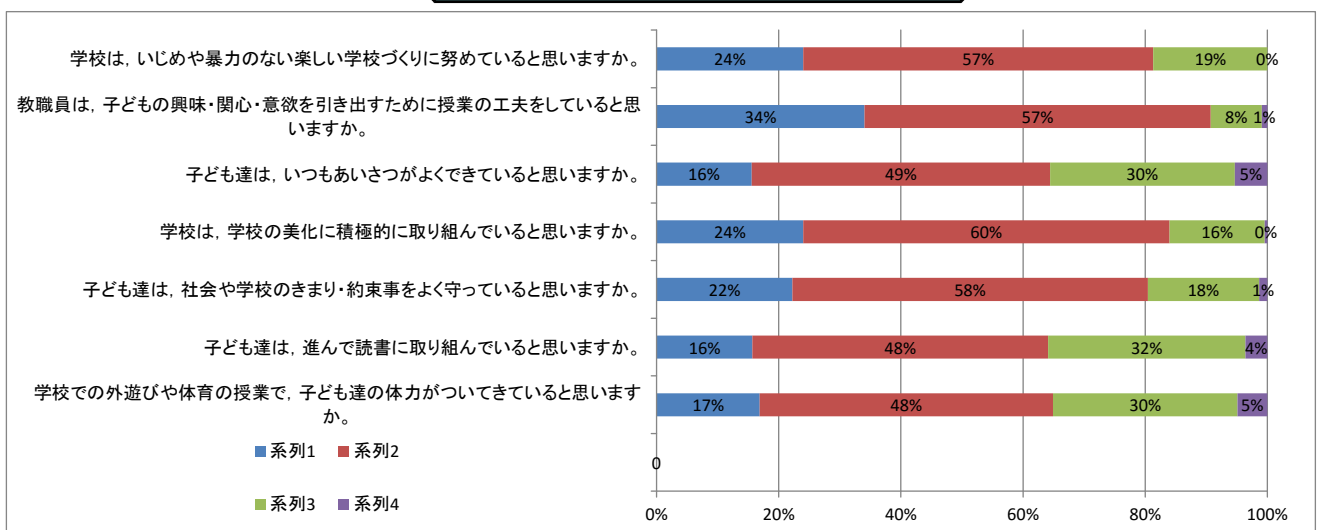
各項目とも、肯定的な回答(系列1，2)をしている児童の割合は、昨年度と比較して肯定的な評価の割合が増加しているが、課題がある項目も個々に見られる。保護者は、昨年度同様、全家庭にアンケートを配り、93%の方に回答いただいた。その結果肯定的な回答は昨年度と比較して増加傾向にある。また、教職員の肯定的な評価の割合も、昨年度より増加傾向にある。

分析・検討した結果を教職員に周知するとともに、学校だより等で保護者に知らせ、今後のよりよい学校づくりや、教職員の指導力向上に生かしていきたい。

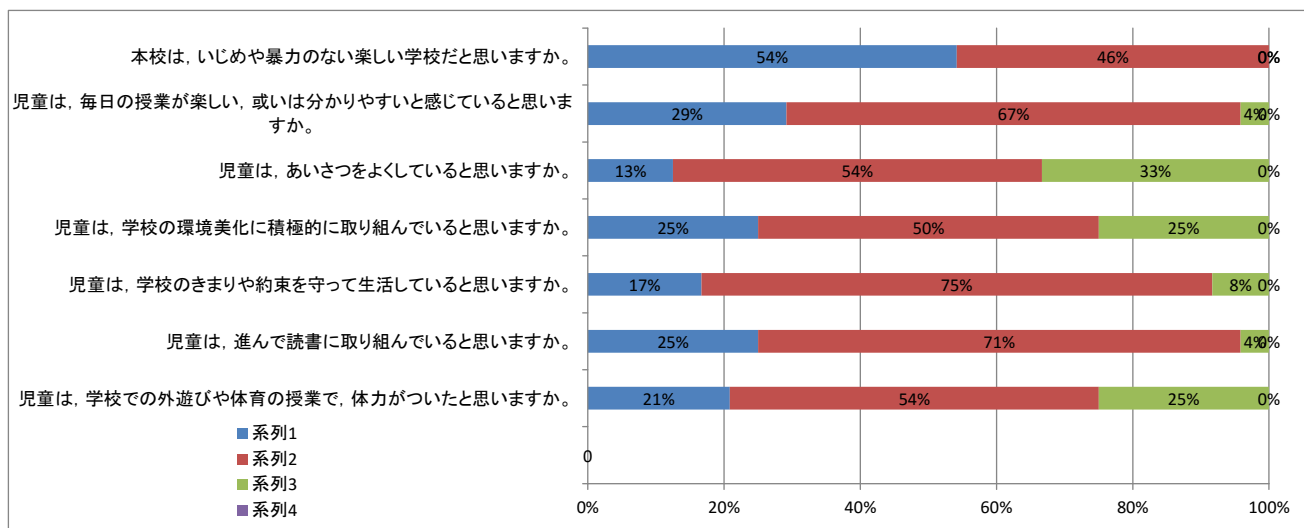
令和2（2020）年度児童アンケート集計



令和2（2020）年度保護者アンケート集計



令和2（2020）年度教職員アンケート集計



アンケートは、児童用、保護者用、教職員用、いずれも4件法で実施

系列1……そう思う

系列2……ややそう思う

系列3……あまりそう思わない

系列4……そう思わない

【設問1】 「いじめや暴力のない楽しい学級・学校づくり」について

昨年度と比較すると、肯定的な回答は児童、保護者、教職員、全て増加している。

児童の肯定的な回答は、昨年度66%に対し今年度87%と21ポイント増加している。否定的な回答が昨年度までは児童3人に1人であったが、今年度は、10人に1人となっており、肯定的な回答が多数を占めている。保護者の集計でも、肯定的評価は、昨年度72%であり、今年度は81%と9ポイント増加している。（2018年度の数字82%とほぼ同じである。）教職員に関しては、昨年度60%であったが、今年度は92%と32ポイントも大幅に増加している。

学級や学校は、児童にとって安全・安心できる場であり、また、楽しく過ごせる場でなければならない。今年度は、5月まで臨時休業になり、通常なら4月当初行われる予定であった学級開きもできず家庭学習が続いた。そのため、児童や保護者、そして教職員の多くは、学校再開時において学級や学校での生活に対し不安を感じていたと考えられる。しかし、学校としてできることを模索し、児童全員が楽しく生き生きとした学校生活を送れるよう、一人一人の児童の人権に配慮し、教員と児童、児童間で信頼関係に基づく好ましい人間関係が成立するように努めることが肝要であると考え、保護者と連携協力し、研修を積み重ねた結果が少しずつ表れてきたと考えられる。特に、今年度は学校の存在意義を改めて考えさせられた年でもあった。今後も、授業の充実、人権教育、道徳教育や生徒指導の日々の積み重ねを意識し、児童の内面に迫る指導を行い、また集団に対する指導もきめ細かく行うことが、児童が明るい気持ちで登校し、安心して学習に取り組め、笑顔いっぱいになり休み時間が過ごせることとなるであろう。「日々の授業・人権・道徳・生徒指導」を重視しながら児童の豊かな心を育ていけるよう、教職員は日々研鑽しなければならない。

【設問2】 「授業のわかりやすさ」について

今年度は、肯定的な回答は、児童については昨年度86%に対し今年度91%と5ポイント増加している。保護者の集計でも、肯定的評価は昨年度の81%から91%と10ポイント増加している。今年度は、家庭学習や分散登校後の遅れた授業時数を取り戻すために、今年度の前半は、7時間授業（1年は6時間）に取り組み、しかも「新しい生活様式」を取り入れた学習となった。そのため、教職員は、より一層、児童一人一人の学習状況に注視し、児童により分かりやすい学習が提示できるよう教材研究に取り組み、熱心に授業の事前準備などに取り組んでいた。また、児童一人一人の基礎・基本のさらなる定着を目指し、研究主題「主体的に学び、考え、表現する子どもの育成」～「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して～に基づき取組を進めてきた。児童も、実際に教室で他の児童と一緒に学ぶことで、学習への意欲も増し、学ぶことの楽しさを再認識できた。

ようである。

また、教職員の評価については、は昨年度80%に対し今年度96%と16ポイント大幅に増加している。教職員が、児童と共に授業を行うことの大切さを改めて認識したことで、より一層授業作りに力を入れることができたことが結果として表れてきている。今後は、タブレット端末を活用した授業にも取り組み、より一層児童の学力向上に努め、教職員自身の研鑽を積み重ねていくことが大切である。

【設問3】 「あいさつ」について

児童の今年度の生活目標にもあいさつにしっかりと取り組むことが盛り込まれており、日頃から意識して取り組んでいる。また、児童会であいさつ運動に取り組んだり、朝の放送で「あいさつは魔法の力」の歌を流したりして、あいさつの素晴らしさや大切さについて意識できるように日々取り組んでいる。しかし、児童では、「あいさつをよくする」の肯定的評価は、3年間で、86%、77%、71%と減少傾向になっている。保護者の評価は、63%、60%、65%と、低い数字ではあるが増加傾向になっている。また、教職員の評価は、29%、40%、67%になっており、校内での児童は「あいさつ」を意識できるようになっていることが見て取れる。

感染症予防対策のために、マスクをして登校を始めたときは、大きな声を出さないようにとも言われていたため、あいさつを進んでするという意識は少なかったように思われる。児童も、慣れないマスク登校で元気がないようにも思えた。しかし、こんな時こそあいさつをして、お互いの心の距離を締め絆を確かめることが大切であり、そのためにもあいさつがより一層大切であると話していくことで、児童の意識も少しずつではあるが変化していき、校内ではあいさつを意識して行う児童が増えてきた。しかし、登下校時の「あいさつ」や地域の方への「あいさつ」等に関しては、できている児童とできない児童がはっきりと分かれており、あいさつを促されて、ようやくあいさつをするのだと気付く児童もいる。

あいさつは、よりよい人間関係を築くための第一歩であり、コミュニケーションづくりの基本である。誰もが当たり前、笑顔で気持ちのよいあいさつができるよう、まず教職員が示していかなければならない学校、家庭、地域のどの場でもあいさつができるように、各クラスでの指導の強化、家庭との連携の強化、教職員による働きかけや、児童会によるあいさつ運動を続け、より充実したものにしななければならない。あいさつが心を通わせる第一歩であることをもう一度認識して取り組んでいきたい。

【設問4】 「校内の美化」について

校内美化である「そうじ」の設問に対しては、児童87%、保護者84%、教職員75%が肯定的評価であった。昨年度との比較では、児童は1ポイントの増、保護者は1ポイントの減である。教職員については、昨年度比で15ポイントの増加で評価が上がっている。

児童は、忍海小学校の学び舎に愛着をもって学校の美化に励んでいる。今年度は、感染症予防対策のため、掃除の時間も短縮し、依然と同様の内容や体制で掃除をすることができなくなっている。そのため、従来なら一生懸命取り組んだ成果が実感できることで、さらに、掃除への意欲へとつながっていたことが、失われてる場面も否めない。しかし、限られた中でも、気持ちを込めて熱心に取り組んでいる児童の姿も見られる。今後、教職員は、「新しい生活様式」の中で、できることを工夫しながら、児童に掃除の大切さを意識させ、全体を見渡した指導を日々重ねていかなければならない。今後も、感染症予防対策を行い、児童の安全を考えながら、児童の校内美化への意識を高め美しい学校づくりを目指していきたい。

【設問5】 「きまりや約束を守る規範意識」について

毎年課題に挙げられる本県の児童の規範意識であるが、児童の肯定的評価は、昨年度91%に対し今年度は84%と7ポイント減少している。保護者の集計では、肯定的評価は昨年度の77%から今年度は81%と4ポイント増加している。また、教職員の肯定的評価は、昨年度の50%から今年度は92%と42ポイント大幅に増加している。昨年度の学校評価では、児童は、しっかりときまりや約束を守っていると感じていたが、教職員の半分が危機的な状況と感じていた。このことから、昨年度は、児童と教職員との間で大きなギャップが見られたことが課題として挙がっていた。しかし、今年度は児童と教職員との間では、大きなギャップは見られないものの、昨年度よりも規範意識が低くなっていることの要因を考えていく必要がある。

学校生活において「廊下は右側を静かに歩く」「チャイムを守り行動する」「忘れ物をしない」「交通ルールを守る」等、児童にとって守るべき項目は多岐に渡るが、これらのことを日々意識させ、実践させていくことが、規範意識を高めることの基礎・基本となる。このことを教職員もしっかりと認識し、児童の心にどの場面でも高い規範意識が育つよう、そして学校生活のみならず家庭・地域での生活においても実践できるよう、今後も家庭と連携しながら心の育成に努めなければならない。

【設問6】 「自ら進んでする読書」について

読書を楽しむ心の滋養も本校の重点課題の一つである。児童の肯定的な回答は、71%で昨年度よりも1ポイント増加しているが、ほぼ変化していないと言える。また、保護者の評価は64%で昨年度と同じポイントである。一方、教職員の結果は、昨年より16ポイント増加の96%となった。

校内においては、朝の読書や読書の時間等でも熱心に読む姿が見られ、数多くの児童が読書に親しんでおり、児童の様子を見ても読書は好きである。しかし、感染症予防対策のために、休み時間の図書室の利用ができなかったり、貸し出した図書の本を家庭に持ち帰ることができなかったりと、例年のように家庭での読書時間が増加しないことが要因の一つとも考えられる。また、読書以外に興味・関心が高い事柄がある様子もうかがえる。図書館便り等を使って、読書時間を家庭でも確保する工夫を発信することも大切である。

今後は、学校だけでなく、家庭でも様々な形で読書に親しめる工夫を考え、読書の有効性などを発信し読書を推進していきたい。さらに、図書委員会による啓発活動や読み聞かせ等をさらに充実させ、より読書に親しむことのできる児童の育成に努めたい。また、学習活動においても図書の資料の活用を進め、多くの種類の本に触れることで読書の楽しさを味わわせていきたい。

【設問7】 「遊びや授業を通じての体力強化」について

体力がついたと肯定的に答えた児童は、83%で昨年度よりも7ポイント増加している。また、保護者の評価は65%で昨年度よりも6ポイント減少している。教職員の結果は、昨年より1ポイント増加の76%となった。肯定的に答えた児童は、増加しているが、一方、保護者は減少に転じ、教職員の結果もほぼ横ばいである。

家庭学習が長期化したことにより、学校再開当初は、体力が落ちている児童も多く、怪我にもつながっていると考えられた。また、感染症予防対策のために、体育の学習等も様々な制限がかかり、水泳学習や持久走なども実施することができなかった。そして、長期にわたって県教育委員会が薦めている「外遊び、みんなでチャレンジ!」の取組も、今年度は十分に実施することができなかった。このことから、例年通りの授業や体力作りができていないと考えられる面は多い。さらに、多くの児童が休み時間に元気に遊んでいるが、より多くの児童が体を動かせるような取組や工夫に関しても発展することはできなかった。普段の生活でもマスクをして身体的距離をとりながら過ごす中で、思いっきり体を動かして遊ぶことの自由さを味わえないことは、児童のストレスにもつながっているのではないかと危惧している。

今後は、感染症予防対策をとり、児童の安全を優先しながらも、体育の授業研究を重ね、より充実した指導を図るとともに、休み時間にはより多くの児童が体を動かせるような取組も計画していかなければならない。

今年度の学校評価アンケート結果は、総じて肯定的な評価が増加していると言える。このアンケートを我々の自己評価とし、この結果を真摯に受け止め、これらの課題を教職員一同で共有し、心身ともにより健全な児童の育成に向け、今後も常に向上心をもって取組を進めていきたい。